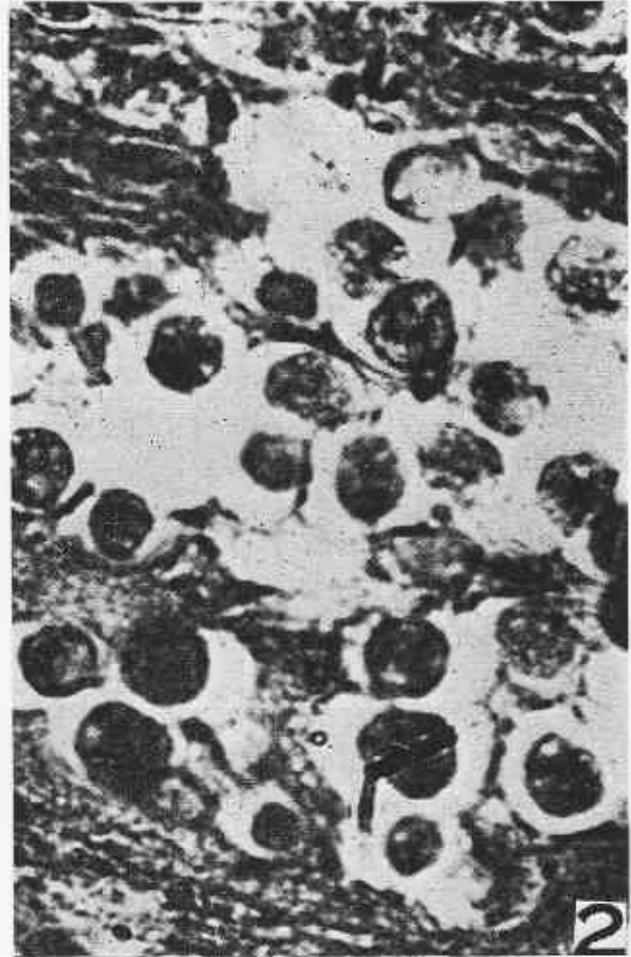
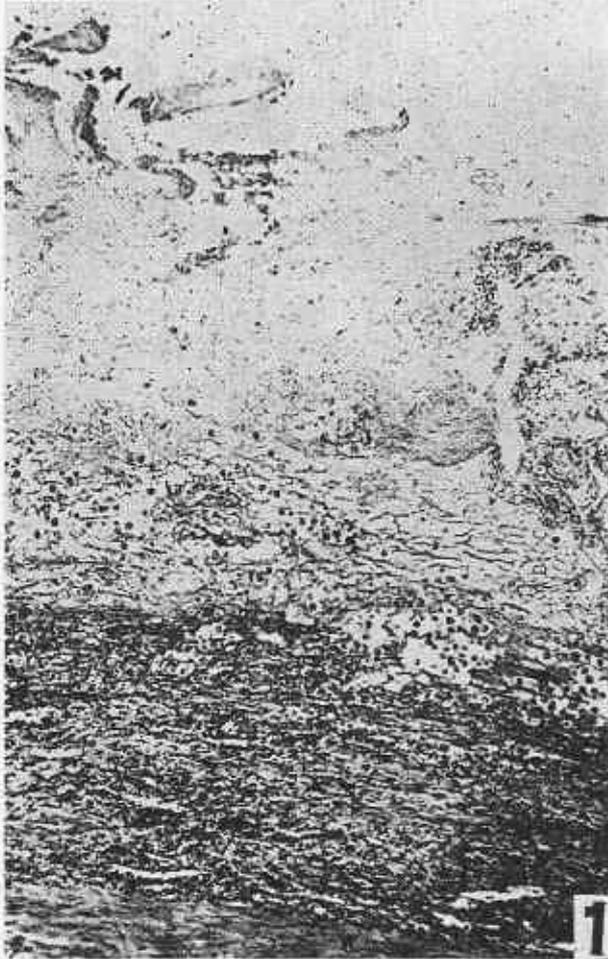


犬におけるアメーバ性腸炎および腸拡張

鹿児島大学農学部獣医学科出題・第3回獣医病理学研修会標本 No.32 A,B.



従来赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) は人の大腸に寄生し、下痢を発生時として死亡することで知られている。本病は稀に犬にも寄生するがわが国では大越博士等により臨床的に検査されているが病理学的研究はない。筆者は偶々犬の剖検でアメーバが小腸に多数寄生し重い腸炎を発生し、さらに腸は拡張症に陥り斃死した例に遭遇した。

材料は和雑種10才、♂、9 kg、鹿児島市産の犬で食欲不振元気がなく瘦削し、斃死したものである。剖検所見は栄養極めて不良、腹水やや多く、胃内容は全くなく小腸前方1/3附近より腸管徐々に拡張し小腸末端まで腸管の拡張著明である。切開するに拡張部の前半は粘膜に著変を見ないが後半部の粘膜は義膜を蒙り灰白色を呈している。廻盲腸結腸開口部および大腸には変状がない。腸間膜リンパ節は腫大充出血し、脾は著明に萎縮、肝、腎、膵は特に異常がない。胸腔臓器には異常がない。

写真、左は小腸の組織像で粘膜は壊死し、なかば崩壊し、粘膜筋板および粘膜下織は円形細胞浸潤が劇しく肉芽組織が増殖し、肥厚している。また粘膜下織にかけて

円形の小体が多数認められるが、これを拡大した像が右で形はほぼ円形で (13~19 μ) 細胞質はヘマトキシリンに繊細網に染まり核らしいものが辛うじて見え、疑いもなくアメーバで恐らく *Entamoeba histolytica* と思われる。かように粘膜および粘膜下織にかけて多数アメーバが寄生しているから、これが原因であることは一目瞭然である。本病変はアメーバ寄生性チフター性腸炎と診断される。粘膜の壊死、義膜化も顕著であるから義膜性壊死性腸炎として取扱つてもよい。アメーバは普通大腸に寄生し時に肝に転移し Abscess をつくることで知られている。本例は小腸にのみ寄生が見られたことは特記すべきことである。なお本例において腸管の下1/3が拡張し、かつ腸壁が肥厚していたが本病変の発現を考察するにアメーバ寄生し、チフター性炎を発生しめ変状が深層にまでおよんだため腸蠕動に異常を来し、特に収縮運動が妨げられ食物が停滞しこれに押し拡げられて腸管の拡張症が起つたものと考察される。腸管狭窄がないにも拘わらずかかる顕著な腸拡張症を招いたことは興味ある現象である。